

---

# また明日を

玉城 水雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

また明日を

### 【ZPDF】

N6267M

### 【作者名】

玉城 水雲

### 【あらすじ】

死にたいと思っていた澪。

やつと幸せを掴んだと思った瞬間

自らを死神と名乗る少年に死を告げられて……

○（前書き）

はじめまして。  
玉城 水雲モスクと申します。

ゆつくりな更新にはなつますが、お付き合いでしてくださると  
嬉しいです。

また来てしまった。  
ベットの中で白石 淳（シリイシ ミオ）は血騒する。

来るに決まってるじゃない。

だつて私は臆病だから、自分から死ぬなんてできない。  
寝ている間になぜか、家に飛行機が突っ込んできたり、火事で私ご  
と全て灰になつてたり

なんて都合の良すぎる事を考えて寝たつて、そんな事が起きるわけ  
はなく

また、朝を迎えてしまつ。

もう、何年そんな事を考えているだらう。

淳は今、高校3年生だ。

だが、別に受験のストレスでこんな事を考えているわけではない。  
すでに、有名私立大学へのエスカレーター進学が決まっており、む  
しろ受験とは無縁なのだ。

そんな彼女が悩んでいる理由、それは家でのトラブルだ。  
いや、トラブルというわけでもないのだらう。

直接的な原因は姉の病気、である。

姉は、なんだか難しくて覚えてはいないが、難病を先天的に抱えて  
おり

丁度、淳が受験校を決めた頃にその難病が悪化してしまつたのだ。

淳の家、つまりは白石家は、由緒正しいのかは不明だが、それなり

に権力と財力を

抱えている旧家なのである。

その白石家を継ぐはずだった澪の姉、蒼（アオ）が立ち上がる」と  
さえできぬ身体になってしまい

そうなれば、次は澪が継ぐことになる。

姉が倒れて、入院することになつてから、すぐに澪は父に呼び出され  
受験する高校を勝手に変えたことを告げられたのだ。  
それは姉が通つて いる有名私立高校だった。

○(後書き)

後書き

見てくださいり、ありがとうございました。  
誤字・脱字を見つけましたら、一つそりとお知らせください。

また来てしまったのなら、今日も生きなくてはいけない。  
と澪は諦めて、学校へ行くことにする。  
とは言つても、車に乗つてボーッとしているうちに学校へは着いてしまう。

「行ってらっしゃいませ。」

と運転手がドアを開けてお辞儀をする。  
こんなこと、澪が中学生の時まで…姉が倒れるまではありえなかつた。  
これは姉だけの特権だと、幼い頃から思つていた。

姉の特権はいろいろあった。  
姉が倒れてからは、その姉だけの特権が澪にも与えられたが、  
一つだけ、やっぱり姉だけの特権がある。

澪が最も欲した特権…。

それは、両親の笑顔…。

小さな頃から、

いや、澪の記憶がある中で、両親が澪に笑いかけた事は一度もない。

家の柱の陰から、何度も、笑顔だけは見たことがある。

しかし、それは余計に澪を傷つけた。

両親が笑わない人間だつたら、そういう人間などと吹つ切れる事ができる。

けれど、両親は姉には… 澪以外には笑うことができる人間など、知つていた…。

じゃあ、何故両親は自分に向けては笑わないのだろう。

きっと…私のせいなどと、澪は思つていたし  
今も変わらず、そう思い続けている。

だつて、現に今だつて両親は私には笑わない。

姉ばかりを見ている……。

そこで、ふつと辺りが騒がしくなつたと思い  
澪は自分が教室に着いたのだと知つた。

女のキンキンした甲高い声は苦手だ。

ましてや、こんなネガティブな事を考えてしまつた朝に聞くこの声は  
きつすぎる。

始業まで、結構な時間がある事にうんざりして澪は鞄から  
iPodも取り出し、外の騒がしさを少しでも遮断させようとした。

だから女子高は嫌だつたのに。

音楽さえかき消す様な大声で、クラスメイトの何人かが  
合コンの話をしている。

まったく、暇なやつらと自分だって暇なのに何故か澪は思ってしまった。

フン、と馬鹿にしたように澪がその生徒たちを見つめていると、その生徒たちが澪によってきた。

さつき馬鹿にしたのが伝わってしまったのか、と澪が内心身構えていたが、そういうわけではないようだった。

「ねえ、白石さんも、エスカレーターで合格確定者だつたわよね。  
… ただけど。何？」

澪のその冷たい切り返しに何人かは怯む、がそのグループのリーダーらしき子は

気にせず話した。

「じゃあ、暇よね。

卷之二

「…私に出るって事？」

「そう。ダメかしい。  
「そりゃ、兼ごつ。  
」

「そ二ね 嫌だわ」

そんなの嫌に決まっているだろう。

「こうより、私がこいつの絶対に参加しない」と彼女は解っているだろうに…。

合コンどころか、遊ぶことさえ断る遼はクラスでも浮いていた。そんな遼に何故頼むのだろう。

「ねえ、お願ひつー他の子たちは、受験で大変だし…」

「そりやつ、田口さんこしか頼めないのよ。」

「別に、無理に話したりしないで、端っこに居てくれればいいから

！」

ああ、なるほど。

やつと彼女らの意図を澪は理解した。

つまり、澪をダシにするつもりなのだろう。

バスの隣に居れば、自分が少しでも可愛くみえる

最悪、この子よりはましだ、と思わせるつもりなのだろう。

「…こいわ。行つてあげる。」

そつ、澪が言つた瞬間、彼女たちはキャー！  
と歓声をあげた。

「ありがと、田口さんー田口さん、美人だから相手のレベルもあ  
がるわー！」

などと、澪からしたら、お世辞にもなつちやこなことを彼女らが  
口ぐちにいつていると  
始業のチャイムが鳴つた。

「じゃあ、場所とかは後で連絡するわー！」

慌てて自分の席に戻りながら、グループのリーダー格が言つた。

座った席から推測すると、リーダー格は織田彩香（オダサヤカ）といつが前の子だった。

三年間、クラス替えは文理分けの時の一度しかなかつたが、  
澪は未だにクラスの人間の顔と名前が一致しない。

ときには、こんな顔の人間がいたつけ  
なんてなるときもある。

要するに、クラスに興味はないし  
むしろ嫌いといったほうが良い。

面倒くさい事になつたな、と思ひながら  
澪はiPodをしまい先生を待つた。

1 (後書き)

ありがとうございました

「わー、白石さん来てくれたんだね。」

当たり前だ。

と、いうよつ、来なくとも良かつたのだらうか。

待ち合わせ場所に指定された公園に居た澪への第一声は

「おはよう。」でもなく  
「来てくれたんだね。」

だつた。

ずいぶんと私は信用されていないらしい。

キヨロキヨロと辺りを覗うが、澪と

「…綾子とやつとも、もつすぐに来るつて。」

アヤコとサシキ

と言われたつて、全くもつて、誰だか解らない。

まあ、この聞話していた子たちだらうから、あの一人のうち  
どひりかがアヤコでもう一方がサシキなのだらう。

「「」つめーん！遅れた？  
「連れてきたよー！」

どひりがどつちなんだらう、考え事にふけつていいたいた澪は

急に騒がしくなった事で、ふと顔をあげた。

すると、いつの間に来たのか4人の男の子に囲まれていた髪の長い方の女の子と田が合つた。

「あ、田石さんもおはよーー！」

多分、こつちの髪の長い方がアヤコだらう。  
確か……。

「この白石さんが、噂の美女だよーー！」

「冗談もほどほどにしてほしい。

呆れたようにそう思つた澪だが、澪が思つているほど澪はバスではない。

いつもふてくされたような表情をしているけれど、笑顔になれば、そこそこに美人だ。

男の子たちが自分を見つめている事に、気付いた澪はフイッと顔をそらす。

「「あ……」」

そらした視線が、誰かと合つた。

さつき澪を見つめていた男の子たちとは別の男の子だ。

「ああ！小山あ、てめーーなんぞつちに面るんだよーー！」

「そーだそーだ、美人を一人占めしてんじゃねーぞー！」

澪と田が合つた子は『小三』とこひこ。こひこヤジを飛ばしてきたやつらと違ひ、その小山は、じつじまゆいひに澪の隣に座つてこた。

「だつてさあ、俺は来たくて来たんじゃねえも。」

ケツと言わんばかりのやの態度は、澪と良く似ていた。

この人も、私と同じで連れてこられたんだ。  
と想つと、なぜか親近感がわく。

チラリと横顔を盗み見よつとする

「わつー。」

また田が合つた。

慌てて澪がめをそらすと小山が話しかけてきた。

「ねえ、あんた…白石だつたっけ?」

「……はい。」

「白石も、連れてこられたんだろ?」

「……やうだと思つわ。」

一瞬、小山が静かになつた。

そして……ブフツ！と吹き出すような音がした。

ギョシッとして澪が小山の方を見れば、小山は腹を抱えて笑つてい  
る。

「あつさまーーあつかしーー。『やうだと思つて、なんだよ。』

しまいには、ヒーヒー言いだした。

なにかマズイ事をしただろうか、と不安になつていていた澪は少し  
ふてくされた様にその様子を見つめていた。

「そんなに、おかしかつたかしら？」

「あつははーなんかすつげえツボつた。」

『それは、良かつたわね。』 そつまつおまつとしたが

「みんなーー行こーー」

といつ、声にかき消された。

なぜかは解らないし、解りたくないがかなり盛り上がり上がつている  
みんなを見て、自然にため息が漏れる。  
あんなのとこれからカラオケに行つたら鼓膜と神経がびくにかなつ  
てしまつ。

「じゅあ、行こーぜ。」

そう言つたわりに、ダリイなどと恥きながら  
小山が立つ。

つられた様に澪も立ち上がり異常に盛り上がつてゐる集団の後ろを  
歩きだす。

### 3 (前書き)

実はこの物語はサイドストーリーでした。  
でも、メインストーリーはアレなので……と思つて「うちをメイン  
にしてみました。

そんなわけで、メインの方もうつするので、アレが大丈夫な方は、  
是非w

あの合コンの日から  
一週間が経つた。

あの中で、サツキが誰かと付き合い始めたらしい。  
なんとかは、知らないが澪にもそのニュースは知らされた。

澪自身は何も変わらず、毎日を過ごしているつもりだった。

が、それではこの物語は続かない。

一週間が経ったこの日、澪の人生は変わったのかもしない。

普段は絶対に鳴ることのない、『飾り』の域にまで達している澪の  
携帯に着信があったのだ。

メールの差出人は

小山 隆明（コヤマタカアキ）

そう、あの合コンで出会った男だつた。  
アドレスを教えたはずはなかつたが…  
と澪がメールを見ると…そこには  
まあ、要訳すれば、『また会いたい。』

とこうような事が書いてあつた。

正直、小山の存在すら忘れていた澪に、念の爲めサラサラなかつた。

面倒くさいので、返信すらせずにベットに放置された携帯が鳴つたのは

深夜といつてもいいくらいの時間だつた。

ぴりりーん

と携帯が間抜けな音をたて、澪に電話が来たことを伝えた。

いつたい何事かと通話ボタンを押した瞬間キーンと、耳がおかしくなりそうなほどに

高い、母親の興奮したような声が響いた。

『みおおー蒼が…蒼が…』

死んだ、と伝えようとしているのか

と、一瞬嫌な事が頭を過ぎたが、次に聞こえてきた母親の言葉は全然違うものだつた。

『蒼の病気の対効薬が、やっとできたんですってー！それで、明日そつそく手術するから母さんも父さんも蒼が退院するまで、家には帰らないから、よろしくね。』

一方的に伝えたら、ブチッと通話は切れ、そのあとには無機質なブープーという音だけがした。

正直、澪にはその出来事が嬉しいのか、解らなかつた。

確かに、嬉しい。

なんだかんだ言つたつて、姉は姉。  
それは嬉しい。

けど、姉がまた帰つてきたら…私は…？

また公立大学を受験するのかしら。

それも、それなりに嬉しい。

だけど、それじゃあ、本当に『姉の代わり』ではないか。

嬉しい。でも…

でも……………？

グルグルと取り留めのない嫌な事ばかりが頭をかすめているうちに  
澪はいつのまにか、眠つていた。

3 (後書き)

ありがとうございました。

「澪おー元気にしてた? 会わないつむじで大きくなつたんじやない?」

姉が帰つてきた。

まるで田舎の祖母たちのよつな、その言葉に澪は吹き出す。

「蒼ちゃん… おばあちゃんみたいな挨拶、やめてよ。だいたい、成長期終わつてるし。」

「だつてえ、澪は私に会いに来てくれなかつたじやない。寂しかつたのよ。」

澪が笑つて言つと、蒼はもう大学生なのに、まるで幼稚園ぐらいの子の様に

頬を膨らませて言い返した。

何気なく、言つたその言葉が澪を苦しめているとも、知らずに。

澪だつて、姉の見舞いにくらい行きたかった。

しかし、こつだつて姉の傍には両親のどちらかは絶対にいて姉と楽しそうに話をしていく、その楽しそうな空気を壊す事なんて澪には出来なかつた。

何度も見舞いに行こうとして、結局行けなかつたなんて、正直に言えるわけもなく、しかたなく

「だつて、私だつて高校生よ? けつこう忙しかつたの。ごめんね。」

「ひ、嘘をついた。

忙しいなんて嘘に決まつてゐる。

部活も、委員会もやつておらず、友達もいない。

でも、蒼はそれを知らない。

「そつかあ、そうよね。今日も忙しい？」

「…ううん。今日は大丈夫。」

「そつかあ、じゃあ、片づけ手伝ってくれるー？」

「いいよ。ちよっと、待つて！」

はーい、という姉の声を背中感じに聞きながら、遅は部屋へ向かった。

別に、部屋に帰つてするにもないが、とりあえず、心の整理がしたかった。

とりあえず、元気そうな姉の姿にほほとした。

でも、どう接すればいいのか、解らなかつた。

姉のせいで、振り回されているわけじゃない。  
だけど、どこか蒼のせいだと思つてしまつ自分もいるのだ……。

ドロドロとした思いを断ち切らうと軽く首を振ると、着信ランプが  
点滅している  
携帯が目に入った。

なんだか、と携帯を手に取り確認する。

：差出人不明のメールが一通きていた。

『最初に会つたところで待つてるから。これないならメールしてよ。

その内容で誰だか解つた。

小山だ。

すっかり忘れていたが、約束といつが…指定されていぬひ田はちよ  
うど今田だった。

行くとも言つていなしのに、ずいぶんと自分勝手だな。  
しゃうがないから、断りのメールをいれようとしたが、

「みおーー。」

と、自分を呼ぶ声がしたのでそのままにしてしまつた。

「 もー、遅いよー。」

「いめんじめん。」

「 もしかして、カレシからのメールでもあつたの?」

「 …違つよ。」

何かを期待するように姉が放つた一言を濁は軽くあしらひ。  
見当違いにもほどがある。

「 なーんだ。」

心底つまらなしつに蒼は言つた。

「 蒼ちやんは、このの?」

そつけなさすぎたか、と慌てて取り繕つ様に濁は訊いた。

「えつ……わ、私は……」  
「へえ、いるんだ。」  
「みつ、澪！……そ、そんなんじや……」  
「……」

「ねえ、彼氏どんな人なの？」

恋をする女の子は可愛くなる。

とどこかで聞いたことがあるが、その通りだな。

と澪は恥じらつて、姉を見つめながらふと思つた。  
そんな根拠のない事を…  
と聞き流していたけど……

「…澪…聞きたいの？」

恋する乙女な蒼は頬を赤く染めながらオズオズと

…できれば、『聞かなくてもいい』といつ返事が欲しいな…

と思いつながら聞き返すが、そんな聞き方をされれば  
「うん。すつじへ聞きたい！」

と返つてくるに決まってる。

「ええ～……だって、まだ彼氏じゃないし…」

「え？ そつなんだ…。じゃあ、片想い？」

意外な蒼の言葉。

その恥ずかしがりようから、彼氏がいるんだと思つていたが

彼氏ではないらしい。

「うーん…。ちゃんと想いは伝えたし、多分付き合はないと想つて  
るんだけどね…。どうかな」

蒼はうふふ、とみでいる人を和ませる様なほほ笑みで  
結構、意味深な台詞を言った。

「ふーん。でも蒼ちゃんなら、平氣だよ。」

そんな言葉をあまり深くはとらえずに…

というより、あまりそういう事の知識がないので解らないまま  
逝つた澪の言葉に

「ありがと、澪。」

「で、どんな人なの？格好いい？」

「ええー！やっと話題逸らせたと思つたのにー。」

「ほり、言わないと片づけが終わらないよー」

「澪は、会わないうちに意地悪に育つちやつたんだね…。解つたよ。  
言つよーー！」

はあ、半ばあきらめたようなため息を一つついて

蒼は語りだした。

「んつと…そりゃあ、格好良いよ！なんかクールっぽくて、大人な  
感じかなあ。うん、背も高くて…」

最初こそしぶしぶといった感じだったのに、話していくうちにノリ  
ノリになつて蒼は

話し続ける。

そして最後は

「年下なんだけどね。」  
としめた。

「年下なんだー。いくつ?」

自分で聞きたい聞きたいといつていた澪だが、だんだんノリノリになつていく姉の

惚氣ている以外の何物でもない様な『レバーブ』に飽きてきて結局、最後の『年下』しか聞いていなかつた。

「…確か、澪とおんなじ学年だったはずだよ?男子校なんだって!..

「蒼ちゃん、本当にその人の事、好きなんだね。」

その『レバーブ』はダルイな、と思ひ反面、いいなと澪は、憧れも抱いていた。

澪はコレといつて恋をしたことがない。

『あの人は格好良いな』とか『優しいな』とかそんな想いは抱いたことがあるが

それが恋だったのか?と聞かれれば、どうだろうか。

バレンタインデーとかでチョコをあげたいと思ひだらうかと問われれば、

『いいえ』  
と答えるだらう。

そんな淡い想いしか抱いたことのない澪にとって、  
強い恋心を抱く蒼は新鮮だった。

「うん！大好きよ。」

「ひ、きっと人を好きだと言える蒼は、憧れだった。

「いいね。蒼ちゃん。」

「わう？…澪も恋したら解るよ。」

恋なんてできるかな。

聞きたい気持ちもあつたけど、姉はその答を持つてはいだらうと心の奥底にしまって

澪は片づけに精を出し始めた。

その心の片隅には、わきまどりの小山からのメールの存在がちらついていた…。



## 5 (後書き)

間が空きましたね…。  
これからもこんな感じになっちゃうかと思いますが…  
よろしくお願いします。

蒼の部屋の掃除が終わってから一時間弱。

澪は公園に来ていた。

台所の時にきた、あの公園…。

もうひとり帰ってしまったからつ。

そう思っていたのに、実際に彼の姿がないことを確認すると  
なんだか悲しくなってきた。

「せうよね。」

なんで悲しいのか、解らないまま、澪は自分に言い聞かせた。

そう、もう頬のせすがないのだ…。

それなのに…

「あれ？白石、来たんだ。」

「…え。」

しんみりとした空気をぶち壊すように聞いたその声は確かに小山  
のもので、

そして振り返れば、先ほどまで澪の心を埋め死んでいた顔があつ

た。

「…え、ってなんだよ。」

「だつて、いるとは思わなかつたから…。」

「なんで? なんでいないと思つの?」

「だ、だつて約束の時間…過ぎてゐる。」

「…ああ、だつてこいつが勝手に指定しちやつたわけだし。メール返つてこないしや。」

「…」めんなさい…。

何時間待つていたのだつて、と考へると申し訳ない気持ちでこいつになつて

澪は自然と頭を下げた。

「別に。来てくれたしや。」

でも、小山は別に気にする」ともなく、笑つていた。

「で、なんの用なの?」

「え? …あー…ひーん。」

澪からしたら、当たり前の事を訊いたはずなのに、小山はなぜか気まずそうにする。

その態度に少しイライラするものの、あまり強くでれる立場ではない。

澪は少し拳を強く握りながら、辛抱強く小山の答を待つた。

しかし、なかなか話ださない。

待ち切れず、澪が口を開きかけたとき、やつと小山が動いた。

「…あのセ、白石って好きなやつとか、いんの?」

「…へ?」

：例えば、俺の母さんが死んじゃって…とか、そんな真剣な話を想像した澪は

あんまり、どうでもいい質問について間の抜けた返事をしてしまう。

「…だから、付き合ひやつとか、いるの?…って、白石聞いてる  
る?」

「…あ、ああ、聴いてるけど。…べ、別に好きな人も付き合ひてる  
人も居ないわよ。」

正直、知つてどうするの?

とも訊こうと思つたのだが、その前に小山が

「ほんと?…?」

とあんまりにも、嬉しそうな顔をしたから、訊けなかつた。

「なにか、文句でも?」

どうせ、居ないわよ。

どうせ、恋した事ないわよ。

ふこつと横を向く。

「じゃあ、俺と付き合わはない？」

今度こそ、思考が飛んだ。

え……？

何？

何か、聴こえた？

「ちゅうと、白虹、聴いてるの？」

また、聴こえた小山の声で我に返った、そして頭の整理をする。違つよね。

幻聴なのよね。

わざわざ蒼ちゃんと話してたから、その影響なのよね。

「うん。聴こえなかつた。」

もう一度、聞き直そつ。

そしたらさつと違つ言葉が聞こえるんだ。

別に、がっかりなんてしない

「まじかよ。じゃあ、もう一回畠かひ、りさと聴けよ。」

別に、がっかりなんて

……

「好きだ。…付き合はない?」

「…………〔冗談?〕」

「…………まじ。超真剣な話。」

やつこつて澪を見る、小山の顔は真剣そのもの。

「ありえない…………。」

今まで、17年生きてきたけど、まさか自分が生田被れる日が来るなんて、ありえない。

ボソリと澪の口から零れた言葉を、違うふうに取つたらじつは小山がガックリと頃垂れる。

「はあー。やつぱ駄目?…あーなんか今までつづってきた女の子の気持ちが解つた気がする。」

なんか良く解らない、少しふワフワしたこの感情はなんだろう。少し夢見心地だった澪だが、なんか勘違いをしたらじつは小山の言葉に、我に返る。

「え?あ、違う、違うよ。別に付き合つことがありえない説じやんくて……」

「…え、じゃあ、付き合つてくれんのー?」

「え、あ、う……うん……？」

付き合う、という行為がいまいち解らない澪はあいまいに答える。  
付き合うってなんだろう。  
別に嫌じゃないけど…

「なんで、疑問形なわけ？」

「…だって、私はあなたのことが好きとかやうこいつ田で見たことないし…。」

「…うわ、結構ショック。これでも結構もてる自信あるのに。」

「おおむねだれで」。

「でも、それでもこ ciòよ。付き合つてゐるが好きでなるつてねーのでも。」

「……う、うん。じゃあ、それで。」

澪が答えた瞬間、小山が飛び上がる。

「やつたー！」

軽く、ガツツポーズまでしてゐる姿をみて、澪は少しへきつとしてしまつた。

……もしかしたら、もう好きなのかもしれない。……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6267m/>

---

また明日を

2010年10月20日13時57分発行